

アンファンテリブル

崎本智(6)

子犬

子犬の名前はアンファンテリブル。……なんて呼びにくい名前だろう。

だけど一度決めてしまったからには名前を変えることはできない。

「名前を変えると言うことはその運命を逃れて、新たな運命に向き合うということだ。そいつはまだ世界にこぼれおちたばかり。まあこれは受けうりのくだらない理屈だが、俺もそう思っている」古代ローマ史を研究している偏屈な兄がそう言った。埃だらけの眼鏡の奥に小さな彼の瞳が見えた。

アンファンテリブルの胴にはチョコレート色のしみがうずまき状にできている。あとは古いシャツみたいなくすんだ白色の毛を生やしていた。フラフープで遊ぶのが大好きで、よくガーデンパーティをするときなんかは大人の退屈な政治や株の話にまざらないように、僕は特大のフラフープを持ちだして、彼と庭で踊ってみせた。僕はそうやってこいつのおかげで上手く子供を演じることができていたのかもしれない。十三歳という年齢にからだも精神もやっと慣れてきた頃だった。

街

レキシントンにほど近いファイエット郡とはどんな場所だと言えるだろう。生まれた頃からここに住んでいるから他の街と比べて説明することは僕にはできない。丘の上には果樹園あり、平野にはたくさんの自動車の部品工場がっつらなっている。大型のトラックもブンブン走っている。少し離れたところには牧場が点在し、牛乳や肉がこの街を経由して合衆国中に出荷される。

この街を訪れたひとはきまって「肉がおいしい」という。初めて訪れた旅人もレキシントンの街に行けばステーキを焼く匂いに胸をうつに違いない。肉がさほど好きではないひとも「果実のようだ」といって夢中になってしまうこともある。ファイエット郡には小川があちこちにながれ、魚釣りも盛んに行われていた。夜になればミミズクたちの合唱。狼たちの遠吠え。大きな月と鬱蒼としげる丘の上の森。森は果樹園を囲むようにして広がっている。

そして街や森をながれる小川が最後には一本の太い運河にながれこむ。僕たち家族の家はその運河の傍に建っていた。

霧深い朝

一九九三年六月の霧深い朝に子犬は古い木箱に入れられて捨てられていた。その木箱を兄が拾って来た時には驚いたものだ。古代史をめぐる文献にしか、興味を示さないやつだって思っていたけどそうじゃなかった。

「ジェイムズ、なんだ、めずらしく読書なんかしているのか」

言い忘れたけど僕の名前はジェイムズと言った。似合わない名前だよ。

兄は僕の本をとりあげる。

そのとき僕が読んでいた本はジャン・コクトー『^{アン・ファン・テリブル}恐るべき子供たち』だった。

蠅が優雅に旋回している。父と母は僕が見ていないとおもって一階でキスでもしているのだろう。メジャーリーグではニューヨーク・メッツとワシントン・ナショナルズの試合中継の音声がここまで聴こえている。

「やめてよ、兄ちゃん。それクロエ・ダダリオに借りたんだ」

「へえあの黒髪に……」僕の顔は紅くなる。兄はスキャンダルみたいなことにはよく鼻がきく。その癖に、みずからはまったく異性に興味を持たなかった。いつも花屋で白い花を買ってきて花瓶にかざり、黙ってそれを見つめているか文献を読んでいるかのどちらかだ。雨の降る日は、彼はいつも機嫌がよく霧の朝にもそれはあてはまった。クロエ・ダダリオについては後述しよう。

僕は薄汚い木箱に入った子犬に気が付いた。その視線に兄は弁解めいたように「家の前に置いてあったんだよ。お前、動物好きだろ。世話しな」と言った。

兄はすぐに部屋を出て、口笛を吹いた。口笛が止んだと思ったら廊下から「お前に名前を与える権利をやろう」と言い放った。

命名

名前を与えること—主人になること—責任を持つこと—僕は一瞬でからだが一瞬になるような気がした。「バードランドの子守唄」を口笛で吹きながら兄はダイニングへ入った。そして大量のウィナーを茹で始めた。鍋が煮え立つ音がする。茹であがるとケチャップをどぼどぼかけて、リビングで食べ始めた。やがて自分が満腹になると僕のためにサンドイッチ用のパンをおろしてホットドッグを作ってくれた。マスタードもぬってくれた。

溜息がもれた。この上なく美味かった。どうやら観念するしかない。いつも気分屋の兄の思い通りになってしまうのは癪だけど抵抗してもむだだ。僕は犬を飼う決意をした。

兄は笑顔で子犬にも一本与えた。ウィナーにおそろおそろ鼻を近づけて匂いを嗅いでいる。まるで初めて食べるように慎重だった。そして子犬はゆっくりと咀嚼した。よく見ると毛並みも整っている。食べ方にも上品なものが感じ

られた。僕のなかに不思議な愛着がながれはじめる。

「名前、決めたのか」兄が僕に問う。

「長いけどアンファンテリブルにする」タオルでアンファンテリブルの汚れを拭きながらそう答えた。

クロエ

サマータイムがはじまって学校の始業時間はずいぶん早まった。僕は時差ぼけしたような気分で学校に向かって自転車をこいだ。田舎だから芝生が敷かれた家が広い間隔をあけて建っている。『ダブリンアース』という緑色のロゴをつけたトラックとすれ違った。季節が夏に近づくにつれ、この地域に引っ越してくる人々は増えていった。『ダブリンアース』という引っ越し会社はここ数年で初めて知ったのだが、近頃、この街でよく見かける。住宅街を抜けて牧柵がつづく平原をひたすら走ると少しずつ自転車の数が増え、やがて鐘の音が平原に響きわたる。教会のような形をした僕たちの学校に到着する。同級生たちと朝の挨拶を済ませて教室に入り、牛乳を飲んでいるとクロエの姿が見えない。

「クロエは？」

クロエの隣の席であるエミリアに尋ねてみると病欠ということだった。エミリアは他の友人たちとクロスワードパズルをするのに夢中だった。エミリア、その笑顔はいつもどんなときも完璧だった。それが彼女の怖いところでもある。地理の時間がはじまって僕たちは合衆国の州について学習する。僕は教科書にアンファンテリブルの似顔絵を細密画のように細かく正確に素描しはじめた。鉛筆でこんなにも上手く書けるなんて僕は天才かもしれないとおもっていたところへ、ベッキンセイル先生からチョークを投げられる。同級生たちの失笑。他愛もない時間が過ぎていた。あの瞬間、日常はどこまでもつづくものだとも僕もクラスメイトも先生も信じていた。

話題

昼休み僕が弁当を食べているとエミリアたちが話している声が聴こえてきた。「あの子がいないとクラスの雰囲気は明るいよね」エミリアがそう言った。僕はエミリアを見る。「だってあの子がいるとき、家族の話題とかだせないじゃん。しばらく休んでおいてもらっていいよね」笑い声が教室の片隅に広がる。僕はエミリアの方を見て黙っていたままだった。エミリアは顎を手の甲にのせたままそのポーズを崩すことはなかった。クロエの祖父は街の厄介者だった。〈ほら吹きダダリオ〉というあだ名をつけられ、昼間から酒を飲み、わけの分からない妄想をしてはそれを街の住民たちに話していた。クロエは昔からとても大人

しく、学校でもみずから発言をするようなことは殆どなかった。じつは怪物、ゾンビ、宇宙人の出てくる映画が好きで、とても真面目な性格であることを僕は知っていた。彼女にノートを借りたときにはいつもその字や線の引き方の綺麗さに驚いた。エミリアもクロエのことをある部分でしっかりと認めていたのだとおもう。彼女の存在を認めるがゆえに自分にはないところに嫉妬していたのかもしれない。こういう場面で僕はエミリアに一言言う機会をいつも逃していた。クロエの恋人でもない僕が彼女をかばうのはおかしいかもしれない。そんな馬鹿なことを考えているうちにエミリアは話題を変える。ひょっとするとエミリアは僕の反応を見て、愉しんでいたのかもしれない。

朗読

ギリシャ語の時間にエミリアが古代の詩を朗読した。感情をこめて詩を朗読する。古代詩というのは音楽と密接な関係があった。ギリシャ語の教師は平然とそう言う。まるで自分の目で見たかのように。さらにとりわけ美しい詩は吟唱されるときに音楽と共に韻律を豊かに読みあげられたと言う。エミリアの朗読は録音されたテープのようによどむことなく、単語の連なりを発音していった。ときに感情的に、ときに歌うように彼女の朗読は先生に褒められてクラスメイトからは拍手が起こった。僕は彼女の声を通してずっと昔の古代壁画のことを考えていた。彼女を見る僕の視線が霞む。あくびが出る。周りからは白い目をされる。

啼き声

校舎の裏に沼があった。沼にはアヒルが生息していた。そのアヒルたちがとつぜんぐわあぐわあと啼きはじめた。けたたましく、止むことがなかった。あまりにもうるさいから僕たちは窓を開けて何事か見ていたが狼どころか野犬の一匹もおらず、猟師たちが狩りをはじめた様子もなかった。

午睡

サクラの木漏れ日のなか舟をこいでいた。数学の時間はそうやって夢のなかで過ごすことが多い。ほら、さっきまで一緒にいたクラスメイト達が岸辺で手をふっている。僕らの真上を雲が幾条も連なり、水平線の彼方までつづいている。しるべのようにどこかへ誘う白い雲。先生が何かを伝えようと大きな声を出しているのに僕にはそれが聞こえない。「See you again！」僕はそう言って權を握る。意識は海と教室を交互に行き来する。ノートに書いた代数の文字が

つぎつぎと崩れる。xの右下へ走る線がノートをどこまでも下に落ちていく。静かな教室、そして辺りは凩いだ海の世界へ。風もないのに波の動きは激しい。小テストがはじまったのか鉛筆を走らせる音が海にまで届いた。僕は鉛筆よりも權を持ち、冒険がしたい。幾条もの雲はやがて重なり、灰白色へと様変わりする。舟はゆっくりと大きな波の谷を下り始める。時間が巻きもどされていくような感覚。「やめ」先生の声か、テストが終わったのか。僕は後戻りできない。しばらく波の谷を下り始めると、いくつかの群島が見えてきた。と同時に僕は自分の目を疑う。海に雪が降り始めた。指先で溶けて消える雪。雪は海面の上に薄く積もっている。それでもちっとも寒くない。

群島の方角から裸足の少年が海の上を歩いて来て僕に問いかける。

「あの本は面白かったかい？」

僕はどの本のことが分からなかったから、首をかしげると少年は笑った。「金属の熱伝導や、白色矮星の安定性に関する基礎的な理論を知識として持っていないとあの本は読めないからきみたちにはまだ難しいかもしれない。私の考えた巨人は確率解釈に基づく数学的な見地からの創造物だからね」僕には少年の言葉が外国語のように聞こえてならなかった。

瞬きをした僕は白銀の世界から、真っ暗な暗闇のなかにひきずりこまれていく。暗闇で声がする。「起きてジェイムズ」

忘れな草の匂いが鼻をつく。すずらんが揺れる丘で花冠をしたクロエが微笑んでいる。「え？」僕は半目で彼女を見る。「草原に横になった瞬間、眠ってしまうんだもの」彼女はまた笑う。そのとき僕の顔をぺろぺろ舐めるやつがいる。アンファンテリブルだ。僕はアンファンテリブルを抱きかかえる。クロエは水筒からアルミ製のカップにレモンティーを注いでくれる。

「喉渴いているでしょ。あなた魔されていたもの」

「クロエ、きみは花冠をつけるような趣味はなかったはずだよ」

「ええ、そう。これはあなたの夢だもの。あなたの願望よ。ほら、あの雲を見て。どんどん黒く大きくなっていくわ。あっちには祖父が眠っているの」

丘の向こうには葡萄を加工する小さな工場。工場を超えると森が続いている。森の上空には暗雲が立ち込めていた。クロエはつづけて言う。

「祖父には祖父の願望があってわたしは向こうの夢にも出演しなきゃいけなかったの。でもさぼってしまったの。気晴らしにあなたの夢のなかに現れてみたんだけど、まるで何も起きなくて退屈ね」

同級生が投げた消しゴムがあたまにぶつかって僕は目を覚ました。

地震

白い雲がひとつぽっかりと空に浮かんでいた。

極めて静謐な午後の時間がながれていた。「授業に集中しなさい」政治学の先生がそう言って僕たちはまたノートに視線を戻した瞬間……。床にかすかに震動し、蛍光灯が揺れる。

「地震？」

皆は机の下に避難する。やがて大きな揺れ。太平洋上の島国で起こった大地震が報道されたばかりだったから、生徒たちはすぐに安全確保に意識を集中することができた。しかし奇妙なことに大きな揺れの後にはまた静かな時間がながれる。そのあとにまた大きな揺れが走る。断続的にそれは大きくなり、小さく繰り返す。余震が何度も続いているのだろうか。それにしても奇妙な地震だった。短時間でこんなにも断続的に揺れる地震は誰も経験したことがなかった。家族は無事だろうか、アンファンテリブルは……。僕の脳裏を家族とあの子犬の顔がよぎる。学校は授業の振替措置をとり、すべての生徒を帰宅させる指示をだした。電話回線は混み合っておりまったく使い物にならない。携帯電話もつながらず、とにかく自分の足を頼りに家に帰って現実と向き合うしかなさそうだった。

避難

学校周辺は平原だったから地震の直接的な被害はすぐには分からなかった。地割れや液状化現象が見られたわけでもなく、また海が近いわけでもなかったから津波の被害もない。牧柵が幾つか仆れていただけだ。僕はファイエット郡へ帰宅する方向の下級生を集めて一緒に帰ることにした。

「暑いけどヘルメットをかぶって帰宅しよう。そして皆、水分を大事にすること。いつ補給できるかわからないからな」

そう言って僕は先頭に立ち自転車をこいだ。積乱雲が澄みきった青空にソフトクリームのように浮かんでいた。何でもなしの夏の日の一ページのようだった。けれど下級生たちも含めて僕たちはおだやかではなかった。学校はつぶれなかったが体感としてもかなりの震度が予測された。しかし携帯のニュースは一向に地震情報を報道しない。ふざけている。一体マスコミは何をしているんだろう……。途中僕たちはファイエット郡の小さな集落に立ち寄った。そこは雑貨店とガソリンスタンド、それから発電所に、数軒の家があった。雑貨店に立ち寄って僕たちは情報を集めようとした。店主はインディアン王冠をかぶった男で新聞紙をレジでひろげて読んでいた。

「すいません」

「どうしたんだ。血相変えて、お前たち学校は……？」

「地震により、帰宅指示がでました。さっきの地震は震度いくつですか」

「地震？」

「三〇分ほど前に起きた地震です」

「あれ、そうなのか。地震なんてオレは気がつかなかったぞ」

僕たちは顔を見合わせる。この男はあれほど断続的に大きな地震があったことに気が付かなかったのか。それとも十キロと離れていないこの場所では地震は起きなかったというのだろうか。

そのあと僕たちがいくら口をそろえて地震の体験を話したところで、男とは全く話が通じなかった。僕たちは蜂蜜入りのパンとミネラルウォーターをその店で購入して先を急いだ。下級生たちとは少しずつ方角が異なってきた。ひとり、またひとりと別れをつける。その度、言いしれぬ不安が宿る。ついに僕は独りになる。地震は確かにあったはずなのに、途中の雑貨店やあるいは他の民家なども全く影響は受けていないのだった。幻想だったのだろうか。白昼夢だったのだろうか。僕は自転車をこぐスピードを速めた。

空に浮かぶ海

「ばかな。そんな冗談はつまらないぞ。もっと気のきいたことを言えよ」

病院事務をはじめて三カ月のキーロン・ベルクは休日、友人のロイス・フラディックと日あたりのよいオープンカフェで談笑をしていた。

「きみは疲れているんだろう。よく眠ったほうがいい。仕事を変えたばかりだから気付かないストレスに蝕まれているんだろう。僕の主治医を紹介しようか」

ロイスは襟に緑のラインが入った白いポロシャツを着て、黒ぶちの眼鏡をかけている。彼はときどき眼鏡のフレームを整えるのが癖だ。

「いや、僕は疲れてもいないし寝ぼけてもいない。酒は飲むが探鳥をしているときに酒を飲むことなんてないのはおまえも良く知っているだろう。運河からいつも通り支流にはいり、森に生息する鳥を見るつもりだったんだ。白い鳥を見たとき近所の少年—アレックス—から聞いてね。それが何なのかを見るために森に入ったんだ。この森の鳥については良く知っているつもりだったがアレックスから聞いた限りの特徴では僕の記憶の図鑑にあてはまる鳥がない。だから自分の目で見てやろうと思ってね」

「それで白い鳥はみつかったのか、キーロン」

「みつからなかったんだ。その代わりにみつけたのが、例のやつさ。ロイス、これは賭けてもいい。デトロイトから取り寄せたばかりの新車を賭け金にしてもいいさ」そこへスタイル抜群の黒人女性が二人の前を歩き過ぎる。その女性が前を通る間二人はすっかり見とれてしまい、無言になる。そして我にかえるキーロン。

「おまえは……」キーロンの言葉をふさぐようにロイスが重ねる。

「僕にはまだ信じられない、空に海が浮かぶだなんて。おとぎ話じゃないか」

再会

「ジェイムズ！」大きな声に呼び止められる。

「クロエ……？」

そこに立っていたのはまさしくあの黒髪のクロエ・ダダリオだった。東洋的な顔立ちをしている瞳の大きな少女。

「フロスト地区のお家に帰るんでしょ」

クロエはいつも真面目な顔をしているが、今日は特に真剣だった。

「きみ、病欠したんじゃ」

「風邪なら治ったの。それより家に帰らないで」

「どうしてさ。きみこそ、こんなところにいちゃ危ないよ」

「あなたも地震があったのは知っているんでしょ」

「え」

「さっきの地震の正体がいまそこにいるの」

「地震の正体……？」

クロエはいらいらとして、額に手をあてて困ったように考え込む。

「説明しても信じてもらえないと思うけどあれは地震ではないわ。」

クロエは爪を噛み始めて、何かを伝えるべきかどうか思案しているようにも見えた。僕は何も推測できず、馬鹿みたいにクロエをみつめつづけた。

「……なの」

「え」

クロエの声は極端に小さかった。

「巨人が飛び跳ねた音よ」

「巨人……？」

「わたしの祖父が最初に目撃したのは十数年前。そのときに色んな証言をしたらしいんだけど、誰も信じてもらうことはできなかった。祖父はその数年後、ほら吹きと言われたまま消息をたってしまったの」

クロエが何を言っているのか僕には上手くつかめなかった。しかし今さら（ほら吹きダダリオ）の汚名を晴らそうとしているようにも見えない。

彼女の声は真剣そのものだった。僕は答える。「きみが嘘をつかないことは知っているが、僕には見えないんだ。どこに巨人がいるのか……見えなければそれはただの地震なのかもしれない。風邪だから熱があるのかもしれないよ」

「違うの。わたし、本当は風邪なんかひいていない。学校はさぼったの。でもそれは朝から胸騒ぎがしたからなの。朝から風がつよくて、家の窓をどんどん鳴らしたの。胸騒ぎがして心臓が高鳴る方に歩いて行ったの。足跡をみつけたわ。運河から大きな足音が学校に向かって残っていたの」

「足跡……」

「そう、足跡。運河から何かがあがってきたの」

「まるできみが好きなホラー映画みたいな展開だな」僕はまだ信じることができなくて、クロエの話を冗談のようにとらえてしまう。

「わたしはホラー映画が好きなわけじゃない。わたしが好きなのはゾンビ映画。『28 日後…』、『死霊のはらわた』、それから『ショーン・オブ・ザ・デッド』とか……」クロエが急に恍惚とした表情を浮かべる。ゾンビ映画について語りだしそうだったから僕は「きみは見たのかい？ 巨人を」と質問をした。

「わたし自身も巨人を見たわけでもない。でもわたし、祖父を嘘つきだと思っていたんだけど、そうじゃなかった気がしてきているの。足跡をみつけて、祖父のことを思い出した。あの誰もいない平日の昼下がりに寂しそうにウィスキーを飲んでいた老人の気持ちが少し見えた気がしたの。どうして信じてあげられなかったんだろう。せめてわたしだけでも」

クロエは困惑しているのかフロスト地区の路上に膝をついて泣き崩れてしまった。「クロエ……。きみが泣くところを見るなんて初めてだから、よっぽどなことなんだろう。でも僕は自分の目を見たものしか信じない主義だから、まだ何とも言えない。そしてきみをここに置いていくわけにもいかない。だから、探しに行こうよ。その僕たちの街を破壊し続けている巨人というのをさ」

四年前の夜

四年前になる。クロエは僕の家近所に住んでいたからよく彼女は僕の家遊びに来た。そのとき大あらしがあったから、クロエは家に帰れず僕の家泊まることになった。まさか車もだせないほど突風が吹くなんて、とクロエの母も迎えに来ることを見送るしかなかったのだ。僕たちはテレビゲームで遊んだあとに夕食の準備を手伝う。クロエにいいところを見せたくて僕ははりきって野菜を切っていた。クロエは何をしていいか分からず退屈そうに突っ立っていた。それから父が近くの河で釣った鱒をムニエルにして、父と母と兄とクロエの五人で食べた。食事のときも兄はずっと本を読んでいて、四人の会話にはいっこうに入ってこなくて、僕は恥ずかしかった。夕食後、母は長い入浴の時間に入り、父と兄は読書のために自室に戻っていった。取り残された僕とクロエはリビングで野球中継を見ていたがよく分からなかったのでクロエが腹をたててテレビを消してしまった。あらしの音が響いている。それ以外には何も聴こえない夜だった。クロエはリビングに置いてある本棚を眺めていた。それは兄のものばかりで、兄は当時の僕にとって悪趣味な本ばかりを揃えていた。「黒死病の謎」「行方不明の少女たち」「伝説の殺人鬼伝」など。クロエは人差し指で本棚から一冊の本を抜き出した。「世界の人体解剖図巻」。

どうしてそんな本をまだ幼い僕たちがみつけられるような場所に置いていたのか分からない。けれど、クロエは躊躇なくその本を開いてしまう。輪切りにされた人間の胴体が載っていたり、ホルマリン漬けにされた脳みそ、草原に小腸を長く伸ばして、人間の身長と比較した写真などが掲載されていたりした。

「これって本もの？」クロエは尋ねる。

「そうじゃないかな。もうそんな本を読むのは止めようよ」

クロエは人間の顔が四十八のパーツに切り分けられる過程を写真で紹介したページを夢中になって読んでいた。

「このひとたちって死後にこんなことをされるって知っていたのかな」

僕はおそろおそろ尋ねてみた。

「少し変わったひとたちなのかもしれない。自分のからだを切り刻まれて写真にのつけられることに快感を覚えるような」

ふふ、クロエは笑う。

砕け散った街並み

彼女はいつも真面目に生活していたが時々、グロテスクなものに興味をひかれる瞬間というのがあった。四年前から彼女はそうだった。僕はなぜかあの夜のことを思いだしていた。クロエは髪を前に垂らして表情をこちらに見せることはなかった。立ちあがって自転車の後ろに乗った。北から向かい風が吹いていた。青空にひろがる入道雲もすごい勢いで西へ流れていった。街は雲の影につつまれてしまった。クロエは黙ったまま、自転車の後ろに乗って僕のシャツをひっぱりながらつかまっている。

瓦礫が落ち葉のように街の色を変えていた。砕けた石膏やコンクリートの粉が舞っていた。瓦礫を避けるため、僕は蛇行しながら自転車をこいだ。空洞のなかに響くような索漠とした風の音しか聴こえない。話声もクラクションやエンジンの音も道路工事の音も何もかもが消えていた。ひとの気配がしなかった。クロエは目を伏せながらそういった風景を見ないようにしていたのかもしれない。クロエの重さはペダルに伝わってくるのに彼女の存在感が何も感じられなかったから、彼女は空白のあたまで何も考えることができなかったのかもしれない。

建物の破壊のされ方に法則があることに気が付いた。ブルドーザーのようなものが通った後は徹底的に破壊されていて、ふと路地を変えると無傷の建物もあった。やはり巨人たちの仕業なのだろうか。あの地震も巨人たちの足音か何かだろうか。巨人の針路は僕の家の方角に向かっていた。

「クロエ……。眠っているの？泣いているの？何か話してくれないと不安になってしまう」

「ジェイムズ、あなたはこれから見ることをじじつだと思って認識した方がいい」

「怖いこと言うなよ」僕は笑った。

笑わないと不安がクロエに伝染してしまいそうだったから。いや、すでにクロエは僕の不安を心臓の音から察知していたのかもしれない。

引っ越し会社

僕は運河が見えたとき、正直ほっとした。そのながれにいつもと違うところは見られなかったから少し安堵できたのかもしれない。冷静に自宅が半壊している状況を飲みこむことができた。僕の部屋を含む、二階がえぐられたように壊されていた。玄関に入ってみると奥から物音がする。まだ家族が誰か残っていたのか。僕は声をかける。「そこにいるのは誰」と。相手が応じるよりも先に僕はみずからの目で確かめることとなった。

グリーンのカップにツナギを着た引っ越し会社の人間がアンファンテリブルを抱いている。アンファンテリブルは瞼をとじて眠っているかのようだった。「待ってください。それは僕の犬です。あなたたちは何をしていますか」「やあ。きみはまだ生きていたのかい。それはよかった。急いで避難しなさい。わたしたちは行政の命令を受けて、瓦礫からこのお宅の財産を運搬しているところなんだ」

空虚な響きが言葉のなかに感じられた。後ろから来たクロエが耳元で「このひとたち火事場泥棒だよ」と呟いた。エンジンの音。窓から『ダブリンアース』社のトラックが見えて、家の横につけられた。トラックは排気ガスを黒煙のように噴きだしている。

「じゃまだ！どけ」ツナギの一人が僕を蹴っ飛ばす。僕たちは抵抗もできず、そこに残り残されることしかできなかった。アンファンテリブルはさらわれてしまう。僕は一切、抵抗することができなかった。

思い出の夕べ

「あなたの犬、さらわれてしまったのね」

「クロエ」

西向き窓の様子を二人で伺っているうちに、僕は過去のことをおもいだしていた。結局時間が進んでも、あたまをよぎるのは過去のことばかりで未来のことなど想像できやしない。母親がよく熟れたライチの実を食卓の上に置いた。同じように西向き窓から外を眺めていた。夕陽がゆっくりと平

原に沈んでいったのを憶えている。あれはやはり夏だったのかもしれない。まばゆく光るライチの実を齧りながら、僕は携帯ゲームの液晶画面に視線を落とす。そのころ流行っていたソフトは何だったかな。たしか出入りする度に構造が変化する城でモンスターと戦うゲームだった。当然、僕は主人公に「ジェイムズ」という名前をつけた。ゲームの中盤、主人公は未来の花嫁となる女の子と出会う。そのときに僕は悩んだ。当時、アイドルで「モニカ」という歌手が僕のお気に入りだったがクラスの連中にそれがばれてしまうのは恥ずかしい。かといってクラスの女子の名前を拝借するのも何だかおかしい気がする。僕は女の子の名前をつけることなどできなかった。そのとき、インターフォンが鳴る。甲斐甲斐しく出迎える母の声。一体だれが来たと言うのだろう。来客など滅多にないこの家に。僕はダンジョンのなかで宝箱をみつけた。そのとき「ジェイムズ！ あなたも早く来なさい」と母から大きな声で呼ばれた。僕は食卓にゲームを置いて玄関に歩いて行った。夕陽の残光が運河の水面に反射してきらきらと眩しかった。逆光のため客人の顔がよく見えない。子供？ そう、それが僕とクロエの初めての出会いだった。クロエはバスケットに沢山のバゲットを持っていた。黒いワンピースに帽子を被った女の子だった。「ダダリオと言います。事情があって故郷に帰ってきました。今後ともよろしくお願いします」クロエのお父さんが礼儀正しく挨拶をする。

「これ、よろしければ召し上がってください。今朝、焼きました」バゲットの入ったバスケットを僕は受け取る。アンファンテリブルも尻尾をふり、歓迎した。

「きみ、名前は？」

「クロエ。あなたは？」

「ジェイムズ」

僕はクロエという名前をゲームの女の子に名付けることになる。

クロエはしきりにあんふあんてりぶる、あんふあんてりぶると発音もただどしく犬の名前を舌のうえでころがした。そのたび愉快そうに笑った。

「何も怖くないわ。こんな可愛い犬」それから僕は倉庫から例の特大フラフープを持ってきてアンファンテリブルとなわとびをしてみせた。クロエは何でもないことなのに大きな声で笑ってくれた。

「変な名前」そう言いながらもクロエはアンファンテリブルのことを気にいってくれたようだった。

「アンファンテリブルのこと覚えていない？ 昔、一緒に遊んだよね」

「覚えているわ。素敵な名前だもの」クロエも懐かしそうな顔をした。

序文

二十三通の手紙はすべてあの「海-Sea-」と「緑-Green-」と名付けた二人の私の子供に宛てて投瓶したものである。私がなぜ瓶を海に投げ始めたかというと彼らが海を住処にしているからである。手紙を届けるにはそれしか方法がない。彼らはどこにもとどまらず、行進をつづけている。彼らは初めからあのような姿だったのではなく悲しみの最果ての……病のようなものかもしれない。彼らの悲しみを私は両手のひらを使っても掬いとることはできないだろう。いや私程度の人間は誰の悲しみを掬いとることもできはしない。あのダブリンで再会を誓った女の悲しみすらも。[『帝国の巨人』(序文) G・ダダリオ著]

暗い家

金になるものはあらかじめ、『ダブリンアース』社に奪われてしまった。古い絨毯がしかれた埃っぽい部屋で僕たちは途方に暮れていた。地震が起こった。そして巨人の存在を知った。でも巨人がおらず、引っ越し会社に資産を奪われて家族の行方も分からない。そして大事なアンファンテリブルを目の前でさらわれる。残ったのはからっぽの家。「きみの家は？」クロエは爪を噛みながら悔しそうに「わたしもさっき自分の家を見てきたんだけど何もなかった。ただ両親はクロアチアに旅行中だから、無事だと思う」と答えた。トラックのエンジン音が聴こえる。僕たちは咄嗟に身をかがめて、カーテンの隙間から様子を伺う。部屋に緊張が満ちる。『ダブリンアース』社のトラックは近隣の住宅にも踏み込んで仕事をしているようだった。街ぐるみで大規模な泥棒をするとは、すべては今日の日のために準備されていたのだろう。おそらく引っ越し会社を装って、この街の下調べをしていたのだろう。息を殺しながら、トラックが去るのを見届けた頃にはもうすっかり夜になっていた。

階段から足音が聴こえて、振り向くと兄がいた。兄はろうそくを灯しながら笑みを浮かべて近づいてくる。「お前たち巧くやったんだな」兄は僕たちを見るなりそう言った。

「どうしてこの街はもぬけの空になってしまったの」クロエがたまらず質問を投げかけた。兄は身じろぎもせず、平然と答える。

「街ぐるみで避難指示が出されたのさ。僕はクローゼットのなかに隠れてやり過ぎた。父と母には先に避難場所へ向かうと置き手紙を残してね」

「奴らはまずこの街のメディアを乗っ取った。架空の地震予知する番組で住民たちに心の準備をさせて、決行の日までは周到に準備をしたのだろう。今日の昼ごろ、街全体に避難指示が出されて、住民たちは誘導されてしまったのさ。もちろん非警察機構の手によってね。小さな町だから、そこまで人手もいらな

いし、この調子だと成功したようだね」
「そんなこと本当に可能なのかしら」
「地震という人々の潜在的な不安に付け込んだ血をながさない平和的な犯罪さ。
おそらく今回の犯行で彼らは誰も殺していない。見事だよ」
「灯りは外に漏らさない方がいい」兄がそう言う。そして兄は倉庫からキャン
プ用のテントを持ちだしてきて、リビングにそれを組み立てだした。
「夜、どうしても灯りが必要な時はここに入ること。今晚の食事もこのなかで
とることにする」そう言って兄はトーストの上にコンビーフをのせたものを作
ってくれた。

こえのしないほうがく

まだことばをうまく思いだせなかったときに
わたしはいまだくらい海の底にいた

にんげんだったときにだれもわたしを信じようとはせず
わらいのめされて馬鹿にされてわたしはあたまが痛くなって
こえのしないほうがくをめざした

こえのしないほうがくはだれもいないところを意味するから
わたしは孤独にむかって帆をたてることにした
貝殻のようにだれとも口をきかず なみのおとだけをきいていても
よかったのだが「世界」はそれをゆるさない
わたしはひとであることをやめてこえのしないほうがくにこぎ出す

苔むした樹をきりたおし 筏をくみはじめたわたしにもはやだれも
きょうみをもつ者はいなかった 夕陽がこの星のうらがわにかくれたとき
わたしは焚火をして白い煙をだしながらよどおし筏をくみはじめた

森の樹はつぎつぎときりたおされた
やがて森の樹をはんぶんきりおとすことによってわたしのからだはようやくの
る筏がくまれた わたしはわたしの法則にしたがって生きるほかはなかったの
だから こえのしないほうがくにわたしは死ぬ

ひとりの小説家の名前

テントのなかで兄は語り続ける。「今回の事件は『ダブリンアース』という引越し会社の犯罪にとどまらず、もう少し他の要素で糸がからまっている。おそらく『ダブリンアース』の連中は建物の破壊には一切関与していない。彼らもこの建物倒壊には驚いているはずだ。俺はクローゼットのなかからこの街に住む友人たちと連絡を取り合い、インターネットの鍵付き掲示板で状況を共有しあった。しばらくの間、建物倒壊については原因をつかめなかったのだが、エミーというHNを持つ女(?)が「これは巨人の仕業だ」と書きこみをした。掲示板はその後、炎上してしまったんだけど俺はこのエミーという人間が嘘をついているようにはおもえなかった。直感でしかないが、考えを巡らせているうちにある一冊の本に行きあたる。昔、俺が読んだ小説の一冊だ」

臙脂色の装丁の本を兄は取り出した。クロエの表情が曇る。

『帝国の巨人』—グスターフ・ダダリオ著。一九八七年に出版されたSF小説だ。これについてはクロエ……。きみのほうが詳しいだろう」

クロエは下を向いたまま黙っていた。

「ダダリオってクロエの家族なの。この小説家は？」兄は僕の問いに答えない。しばし沈黙がながれたあと、「そう、グスターフはわたしの祖父……」とクロエが言った。夜風に白いカーテンが揺れていた。クロエは白いカーテンの端をつかんで窓の外を物憂げに眺めながらつぶける。

『帝国の巨人』は祖父のデビュー作なの。当時はSF小説として発表されたんだけど文体や心理描写が注目されて、多くの批評家にも賞賛されたそう。でも祖父はこれ以後に書いたものはすべて編集者と揉め事を起こしてばかりで発表されなかった。彼の人生でまともに出版できたのは『帝国の巨人』だけなの」

「クロエはこの小説を読んだかい」

「うん、わたしは祖父から特別可愛がられていたけれどわたしは祖父を愛していなかった。わたしのお母さんに暴力ふるっていたから。だからわたしは彼の書いた小説に興味を持たなかったわ」

「偏屈な爺さんだったものね。俺も子供の頃、何度どやされたか……」兄はランプの灯りを調節しながら、昔を懐かしむ目をする。

『帝国の巨人』の舞台はここファイエット郡の田舎街さ。つまりは俺たちがいるこの街のようなね。そこに写真好きの男の子が住んでいて、街のあらゆる場所で写真を撮って現像してみたら、あちこちに巨人が映っていたんだよ。以来、巨人たちの存在は男の子のカメラのレンズを通してのみ、発見されることになる。でも多くのひとは合成写真だと疑って聞かないんだ。まるで狼少年のような扱いを受けた男の子は巨人を恐れて森のなかで暮らすようになる。そこで村を追放された魔女と出逢い、恋に落ちる。男の子は最終的に魔女の力を借りて、巨人たちと意思疎通をとりはじめる。そして巨人たちに静かに森で暮らすように説得する。巨人たちは最初、少年の存在に戸惑うものの少年の存在を認め、

彼の願いを聞き入れる。少年の勇気ある行動によって巨人たちは街から遠ざかった。そのじじつを街のひとは誰一人として知らない。主人公は永遠に狼少年として生きる。大雑把にいうとそんな粗筋かな。あと当時、話題を読んだのは物語の間に挿入された私信のような手紙なんだ。その手紙が物語とまったく関係性がなさそうに見えることから、批評家たちに手ひどく攻撃されていたね。冗長だってさ」

丘の上の森

風が窓を叩く。誰かの叩く音に聴こえて不気味でしかたがない。

運河の上流から下ってくる風がこの街で反響するため、悲鳴のように聴こえることもある。昔からつよい風が吹くときは変化の予兆のように感じる。じじつ、その予感はあることになる。眠りにつこうとテントから出て適当な毛布をかぶって目を閉じていたところに再び、兄が現れた。

「お前たち喜べ。巨人の謎を掴んだかもしれないぞ。クロエ、きみのお祖父さんが行方不明になった日を憶えているかい？」

「六月二十日です。その日を命日としています」

『帝国の巨人』の主人公が消息を絶った日も六月二十日なんだ。この小説は時間軸を丁寧に描いているから、冒頭から時間を辿ればこの小説の終わりが六月二十日であることが推測される。そしてこの少年はどこに消えたのかわかるか」

「丘の上の森」僕が答えた。

「その通り。かつて愛した魔女がそこにいたからな。つまりグスターフはどこに消えたのか判るよな」

「森……ってこと？」

「そう、極めつけは俺の過去の記憶。俺が友人たちと森を彷徨って死体を探していた時だった。ちょうど『スタンド・バイ・ミー』がテレビで再放送されて俺たちはいても経ってもいられなくなり、死体を探しに行ったんだ。丘の上の森っていう手近な場所にね。そこでおあつらえ向きに廃線の線路をみつけたんだ」

「兄さん。それは廃線ではなくて炭鉱のトロッコのために作られた線路だと思うよ」「ああ、今考えればそうなんだが俺たちは興奮してその線路を辿りはじめたんだ。どんな死体に出会えるんだろうってね。そうしたらあの爺さんがいきなり茂みから現れて、俺たちを叱り飛ばした。どうやらあの森は私有林だったんだね。きみのお祖父さんの」

「そうです。でもあれは祖父のものだけど、今はわたしの親戚のひとたちが管理しているものになります。わたしの家族はあまり関与していません」

「なるほど。で、だ。話は戻るけど、祖父さんは特に理由もなく俺たちを叱り

飛ばしたのではないと思う。目の色が変わるぐらい怒っていたからね。だから祖父さんは俺たちに見られたくないものをあの森の奥に隠していたんじゃないかと思うんだ。小説の主人公と同日に消息を絶つようなロマンティスト。どうせなら行き先も同じ場所を選ぶだろうさ。隠したかったものとは何だろうね。手掛かりは何もないわけだから、お前たち二人はそこへ行ってみてはどうだい」

地図

兄は記憶を頼りに、白い大きな紙に森の地図を描いてくれた。驚くほど精密な地図で兄にこんな才能があったなんてまったく知らなかった。しかし兄が『スタンド・バイ・ミー』をしていた通りに森を進んでも線路はなかなかみつからない。それ以外はほとんど完璧に記されているのに線路の場所だけを間違えたのだろうか。地図のことを疑った瞬間、風に地図をもっていかれた。木々の向こうに飛んでいく地図。森は何も答えてくれない。沈黙が辺りを支配する。

木々の向こうから一羽の白い鳥が上空を飛びたっていった。

墓と棺

唯一の指針をなくしてしまった僕たちはひどく疲れていた。腰を落として草叢の上に座る。手のひらに何か硬いものがぶつかる。

石かと思って目を向けて見ると枕木の一部だった。森のなかにたしかに線路は存在したのだった。枕木は朝露でしっとりと果物のように濡れていた。その腐りかけた木片を辿り僕たちは再び歩き出す。クロエはパンの切れ端を僕に渡してくれた。僕は口に含みながら歩いた。ふと気が付いた。クロエは森に入ってから何も食べていない。

「クロエはどうして食事をとらないの」

「お腹は空いているんだけど、気持ち悪くて食べられないの。祖父の魂とわたしの胸騒ぎが何か関係しているのかもしれない。わたしと祖父の意識はどこかずっと遠いところでつながっているのかもしれない」

足よりも重そうだった。僕は水筒の水だし紅茶をアルミ製のカップにそそいだ。そしてパンの切れ端をひたしてクロエのくちびるを濡らすようにそれを食べさせた。クロエは抵抗もせず、そのパンをやさしく噛みはじめた。

「こんな方法しかないけど」

「いえ、おいしかったわ」

木の葉や草花の匂いが濃くなる。湿度が増してきたようだった。

ひと雨来るのかもしれない。風が急に止んだ。

三時間は歩いている。その枕木はもはや幻影のようにどこまでも続いている

ようだった。僕たちは会話をせず、僕は前方を見て、クロエは僕の背中をみつめて歩いていた。藪蚊にさされながら、額に汗をかきながら僕たちは睨むように枕木の終わりを待ち続けた。そこに何があるのだろう。そしていよいよ本当に雨が降り出した時、僕たちはびしょ濡れになりながらも合羽を着て、どちらともなく走りだした。息遣いが聴こえるくらい近くを走っているのにクロエが何を考えているのかは全く読めなかった。僕はおそろおそろクロエの顔を見ようとした時、クロエの表情が変わった。

「ジェームズ……。あれをみて」

そこには小屋があった。農具を入れておくような小さな建物だった。

僕たちはそこに入り、合羽を脱いだ。呼吸さえ上手くできないような重い熱気に包まれている。僕は大きな溜息をついた。暗い小屋にはどこかから隙間風が入ってくるのか、空虚な風の音が聞こえた。クロエは肩を震わせていた。泣いているようだ。気持ちはわかるが泣いても何も解決などしないぞ、と言おうとしたとき、クロエが泣いている理由が分かった。小屋の隅には石板のようなものが据えられてあり、そこには「グスターフ・ダダリオ ここに眠る」との墓銘が刻まれていた。

クロエはお祖父さんの墓をやっとみつけたのだ。クロエは泣いている。祖父の死などさして気にしていないようだったのに、実物を目の前にすればやはり感情に何かながれたのだろう。僕は胸に手をあてて、目を瞑った。

墓の前でしばらくの時間が過ぎた。ある疑問が取り残されていた。小屋の周りで風など微塵も吹いていないのに風の音はどこから来ているのか。墓碑に目を向け、耳をあてるとたしかにびゅうびゅうと風の音が石のなかより聴こえてくるのだ。

「クロエ、ごめん」

僕は許可を取るよりも先に石を押しつけた。その途端に風が舞いあがる。僕たちは髪を逆立てるほどの風に驚いた。さらに石の下には地下へ続く階段がある。泣きやんだクロエの頬に涙のあとがかすんでいる。僕は階段を降りることにした。クロエも続く。懐中電灯で照らすと階段はとても狭かったがしっかりと造りになっていた。誰が何のために造ったのか分からないが、やがて階段は終わりひとつの部屋に出ることになる。

不思議な感慨だがその地下の部屋に入った時、炭鉱夫たちのにぎやかな声が聴こえるような気がした。明るい部屋で酒を飲み交わし、トランプをする人々。それらの像が浮かび上がる。けれど瞬く間に消える。実際にはがらんとした部屋だった。風が吹き古い新聞紙がくしゃくしゃになってころがっている。風は部屋の奥の格子窓から入ってきているようだった。窓からは何とファイエット郡の街並みが一望できた。街に面する崖面のなかにいることが分かった。懐中電灯であたりを散らすと、書きもの机に伏した白骨の遺体があった。僕は壁面

を見てさらに驚く。壁には幾つもの新聞紙が貼りつけてある。

「この遺体はおそらく祖父のものだわ。この部屋そのものが棺なのね」

クロエは袖をめくってみずからの肩のあたりを撫で始めていた。無意識にしているかわからないが彼女は何だか祖父の孤独という感情の冷たさを肌身で感じているように見えた。二匹の蛇が絡み合うような形象の銀の腕輪をしていた。

クロエがそんな装飾品をつけているなんて、今までずっと気がつかなかった。

「狼少年は、わたしの祖父そのものだったのね」

クロエは寂しそうにそう言う。「誰も彼のことを信じていなかった。あたまがイカれた老人だと思っていたの。当然、わたしもね。だから彼が森に消えた時、やれやれって思ったわ。やっとやっかいものがいなくなった。わたしの父も母も少なからずそう思っていたはずよ」クロエは黙り込んでしまう。

彼はこの場所で「魔女」に会えなかったのだろう。机の端にはノートが置かれ、開いてみると小さな字で小説や詩のようなものがいっぱい書かれてある。読まれる可能性のなかった文章たちが寂しさの断末魔のように映った。

クロエはそのひとつを朗読する。

雨土の記憶

グスターフ・ダダリオ

黎明のひかりが
柊の葉から垂れて
淡い陸橋によりかかる

角笛形の杯に
ひかりはそそがれて
王の目にとまる

汝、望むなら
我が国の紋章にならないか

断ると
ひかりは王の喉に
消えてしまう

ひかりは死に
またよみがえる

うまれかわった
ひかりはやさしく
街をとしながら
ちいさな郵便局に
忍びこむ

ひかりは配達人の
鞆のなかに

手紙は
海を越えて
国境を越えて
地球上のあらゆる場所へ

ムザブの谷を
特別便に任せて
自由旅行

紅い頬の少女と
月夜の晩にだけ
踊り明かす

遊覧の歳月が
背負い始めた
約束とそれから

ひかりは聖堂の
錆びた蛇口へ
神様のお告げを
きくために

風になったひかりは
紅い頬の少女の
故郷へ

風葬された
祈りの言葉が
雨になって谷を濡らす

空の街に
虹がわたり
鳥がわたる

ひかりは
燃えて
灰になり
星になり
また消える

エミリアの朗読と比べて抑揚のない読み方だったけどクロエの声には独特の深みがあった。長く気まぐれな春の雨。気だるそうな猫。水たまりに落ちた枯葉。そんなイメージが彼女の声から浮かんだ。

グスターフの夢

白骨のまわりには **Power Macintosh** で入力された新聞の原稿がいくつか散らばっていた。壁には大きく「巨人」の文字が躍ったタブロイド紙が何枚も壁を埋めるように貼り付けられていた。

「これ、西暦じゃないよ」

タブロイド紙に記載されている年号は見たこともない暦だった。

架空の新聞に存在しない街の名前が描かれて、巨人に街を破壊されたことが伝えられている。巨人のことについては詳細に記述されていない。クロエはノートを開いて読んでいる。「ジェームズ……グスターフは『帝国の巨人』の続編をやはり書こうとしていたんだわ」

「え」

「『緑の行進』というタイトルで構想がまとめられているの。これ『ダブリンアース』っていう組織が出てきているし、わたしやあなたの名前も出てくるわ」

「いったいどういうことなんだ。僕らが生まれてからこのノートは書かれているだろうけど、『ダブリンアース』という会社組織はグスターフとつながっていたんだらうか」

「あるいはファイエット郡の街や村がまるごとグスターフの幻想のなかに飲み

込まれてしまったってこと？」

「どちらかしか考えられない。偶然思いついた会社名とは考えにくいし、『緑の行進』はこれらのメモから察するに巨人たちが不可視の状態によって一ひとびとの言説だけを通じて一出現する作品のようね」

「じゃあ、やはり巨人は存在しないのか。『緑の行進』と現在の世界がつながっているとしたら」

「断定するのはまだ早いと思うけど」

わたしのからだはどこかの海の色

筏は三度のあらしでもとのかたちにもどることもなく海底にしずんでしまった
いっそしずんだのが筏ではなくわたしであればよかったのとおもいながら
波間をただよっているうちに いくつものあめにうたれて わたしはみずと同
化していくような感慨をえた

その感慨にふけり夜を迎え満月を迎え 気がついたときにはついにわたしのか
らだは海のみずとの境界をなくしてしまった

いまはもうわたしのからだは海の色

海の巨人

雷が鳴る。雨がつよさを増して降ってきた。風もつよく格子窓から森の枯れ
葉が入り込んでくる。灰色や土色の枯れ葉たちが風によって舞い上がる光景。
灰色の雲はすでに雷を忍ばせた黒雲に変化していた。そのとき、幻影だろうか。
青く美しい海の色が窓に広がったのだ。

「海？」

「え」他のノートを読んでいたクロエもそれに気が付いて窓の方を見る。

たしかに窓の外にはセルリアンブルーの南の海が広がっているのだ。しかし
それは奇妙なことに海の風景ではなくて海面が絵のように切り取られた平面的
な幻想だったのだ。

「あれは……あれが……巨人の正体！？」

平面の海は遠のくにつれてそれがひとの形になっていることが分かった。波
は揺らめき、陽の光さえ反射しているのにそれはひと形の枠におさまっている。

「マグリットの『大家族』みたい」

マグリットの『大家族』は鳥の形に切り取られた「空」の絵画だった。それ
が巨人の枠組みになって、「空」は海になって現れてしまったのだ。

「祖父グスターフはマグリットが好きだったわ。一度幼いころ、美術館に連れ

で行ってもらったことがあるの」

「巨人がこんなに幻想的な存在だったなんて、あれは倒したりすることができ
るんだろうか」あらしのなかのセルリアンブルーは優雅に街を破壊していた。

「とにかくここを出て、一旦僕の家に戻ろう。兄のことが気になる。ここに
あるノートやメモは持ち帰ってもいいかな」

「いいと思う。おそらくこの場所は祖父の死後誰にもみつかっていないと思
うし、誰も知らない場所で合った方がいいと思うの」

クロエは何かを決意したような顔をしていた。

「巨人もやはり存在していることがわかったから、対策を打たないとね。祖父
の夢に終止符を打たないといけない」

『ダブリンアース』社はこの夢と世界との混濁を予期していたかのような犯罪
をしでかしたわけでだけど、彼らに聞けば何か分かるのかもしれないね。僕た
ちはこれからあの会社の本国アイルランドーダブリンに向かうというのはどう
だろう」

「わくわくしてきた。ファイエット郡を出るのは久しぶり。海外旅行なんてし
たことないけどきっと何とかなるよね。……ダブリンまでお祖父さんの夢に食
われてしまっていないといいけど」

「何が起こるか分からないよ……。この骨はここに置いといていいのかい」

「この地下室はお祖父さんのお墓なのよ。幻想のなかに眠らせておいてあげ
たい。でも私たちの世界がお祖父さんの夢に食われてしまうのはナンセンス」

「話しながら歩こうか、一旦僕の家まで。兄のことも気になる」

兄と僕

「父さん、母さんのことは俺が何とかする。クロエの両親もきっとみつけだす。
それよりきみたちは、きみたちしか過ごすことのできない時間の旅をつづけて
くれ。グスターフ・ダダリオの夢に世界が浸食されているという想像は馬鹿げ
ているが一面では真実だ。きみたちにしか解きほぐせない、からまった糸なの
かもしれない。それからアンファンテリブルのことも頼む。大切な家族だから」

家を出発するとき、父の部屋から銃と弾薬を持ち去ったことを兄は気付いて
いるだろうか。兄には昔からすべてを見透かされているような気がする。

横断

アイルランドーダブリン行きは船で行くことにした。時間はかかるが、大勢
の旅行者にまぎれることができる。空港はおそらく待ち伏せされているだろう。

大西洋横断の遠洋定期船が出ている港街につくと僕たちはそれだけでもう長

旅をした気分になり疲れ切ってしまっていた。クロエは黒髪で目だってしまうことから僕はその港町で帽子を彼女に買った。彼女が別の買いものを済ませているうちに買った。クロエは特に嬉しそうにもしなかったけど、そのとき以来外にいるときはいつもその帽子をかぶるようになった。ホットドッグとコーラを買って、船底の自分たちのベッドにおさまり靴をぬいだとき、やっと息をつくことができた。同室には家族連れがいて、もうそれぞれのベッドで眠りについていた。双子の子供が仲よくひとつのベッドで眠っている。睫毛が長い子供だ。寝台の上段に僕が、下段にクロエが眠る。格安の切符だったから、もっとスクリー音やエンジンの音がして眠れない場所かと思っていたけどそこはまさに深海のように静かな場所だった。クロエの寝息が聴こえる。僕は安心して瞼を閉じた。

星宮

巨蟹、獅子、獅子、獅子、処女、処女、天秤、天秤、天蠍、天蠍、人馬、人馬、磨羯、磨羯、宝瓶、宝瓶、双魚、双魚、白羊、金牛、金牛、金牛

エミリアの憂い

ルネ・マグリットの「白紙」と題された絵画を見ているうちに涙がわたしの頬を伝っていた。この涙がどこから来たのか、本当に自分の瞳からこぼれおちたのかわたしには分からなかった。わたしはいつも憂いのなか。学校にいるときは虚飾したみずからに成りきる。エミリア・バーキントンを演じることにためらいはない。話題の中心にいる自分を誇らしくも思っていた。

プールの時間。周りの友達は大膽に肌を露出して着替える。わたしはそのときだけは慎重にだれにもわたしの肌を極力見せないように更衣室の隅で着替えをする。水着に着替えてからもわたしはそわそわしてばかり。べつに痣もタトゥーも入れていない肌。だけどわたしのからだに視線があつまる時、わたしはわたしの肌以上の何かを盗まれた気がする。わたしの心の奥にある抽斗に入れた一冊の個人的な過去の記憶を綴ったノートを盗み読みされたような気がする。笛の音。笑い声。波しぶき。夏の太陽はわたしがノートを隠すのを手伝ってくれないし、輪になってわたしを尋問しているように感ぜられる。憂いがこの塩素たっぷりの水にも含まれているだろう。だってわたしが泳いだのだもの。わたしのからだからわたしの憂いがながれだしている。

暗い部屋。わたしはドアを閉める。帰宅するとマグリットの画集を眺め、水

槽の魚たちに餌をやることしか、愉しみは見いだせない。これから、眠るまでは英語と数学とギリシャ語と化学と物理を勉強し続ける。そうじゃないと明日のエミリアが剥がれ落ちてしまう。先生、わたしをあまり褒めないでください。

自画像

鏡をのぞいてもいまの自分を見ることはできない。
いまの自分でも過去の自分でもなく、鏡に映るのはあなたが愛さなかった他の誰か。

豎琴の橋とダブリンの魔女

サミュエルベケット橋を渡りながら、僕たちは曇り空のダブリンの街にいた。ダブリンの街を北と南に分断するリフィー川は鋼のように白くひかり、薄らと雲を映していた。『ダブリンアース』社の本社はこの近くと調べて訪ねてみたものの、それらしきなかなか建物はみつからない。仕方なく僕らは近くのブルームハウスというホテルに予約を入れた。壁の色は少し濁っていたがなかは清潔に掃除されていて、僕たちはすぐに気に入った。翌日、ホテルのカフェで朝食をとっているときに、相席した老婆に僕たちは話しかけられた。

「新婚旅行か何かかしら」

「僕たちは高校生です」

「あら、そうなの失礼」

「いえ」

そこから沈黙がしばらく続いた。クロエは見知らぬ大人と上手に話すような性格ではなく僕もその手のことは苦手だったから何を話せばいいのか分からず気まづくなった。老婆はそんなことは気にする様子も見せずに、茹で卵と野菜を食べ続けている。ハンカチで口をぬぐい、またこちらを見つめる。

「探し物はみつかった？」

「え」クロエと僕は目をまるくする。

「やはり、まだのようね。それから知ってる？あなた達どうやら人気者みたいで近くの怖そうなおじさんたちがじっと見ているの」

老婆はハンカチで口を押さえたまま小声で話したから、遠くからは何をしゃべっているのかは分からなかったろう。僕たちはティーカップに映る人影を意識しはじめていた。

「肩のちからを抜きなさい。警戒されるわよ」老婆がつよい口調で言う。

「あなたは、いったい？」

「昔、香草を庭で育てていたの。ありとあらゆる香草を育てて、あたしの衣服

や肌にそれをふりかけたとき、夢のような匂いがわたしを纏った。あたしは魔法使いになれたと思ったの。それからこのダブリンに来たわ。懐かしい友人に会えないかと思ってね。でもそれはあたしの思い違いだったみたい。あのひとはもうとっくに死んでいる年齢だから」

「あなた、魔女なの？」クロエはティースプーンを落としてしまう。

大理石の床にスプーン音が響く。大勢の客がこちらをみつめる。クロエは震えている。魔女を見たことに驚いているのだろうか。

「あたしはアン。ただのばばあよ。生活保護を受けているの。でも着ている物はぜいたく品ばかりよ。こうしてホテルでお茶もするの。あなたはあたしのような女にはならない方がいいわ」それから老婆がふいに僕を見る。

「男の子は果たせない約束をしないこと。じゃないとあたしみたいな女が増えてしまうからね、まったく！」

遺言

レーメルシュタット通り。預言者や占い師がかつて住んでいた街。まとわりつくような視線。石畳の下り坂を僕たちは歩いていた。歩調を変えながら、複数の足音に追跡されている予感。エージェントなのか。銃と弾薬が胸のなかで燃えたぎるようだ。銃はいまにも火を噴きそうなイメージで僕は心臓の傍に忍ばせてある。クロエは目深に帽子をかぶり、平静を装っている。

歴史ある街で交わされた様々な憶測。それらが呪文のようにあたまのなかで反芻し僕たちを襲うようだった。クロエも頭痛に襲われているようで互いにからだを傾けあいながら僕たちはバランスをとり、前へ前へと歩いている。ふいに胸ポケットから芳しい香りが放たれていることに気がつき、さぐってみると出てきたのはハーブだった。ドラッグのような危険度の高いハーブではなく、変哲もないマジョラム。僕はマジョラムの匂いを嗅いでそれをクロエにも渡した。クロエも幾らか気分をとりもどしたようだった。引き金に指をかけるのを止めて、僕は緑色のマジョラムの葉を握りしめていた。

ボート

セントステューブンスグリーン中央にある湖へと向かう。僕たちは一艘の手漕ぎボートをボート小屋で借りる。季節外れのマフラーをまいた老人にお金を支払い、棧橋に向かう。老人はくすくすと笑って僕たちを見ている。

「何か？」と僕は聞いてみた。侮辱されているのかと思った。

「いや、失礼。いまふいにね、自分のこれまでの生涯のいっさいを忘れてただひとりの老人として若者二人に向き合った時、この情景がどこかで読んだ本のなかに出てきた気がするんだよ。ああ……変なことを言ってしまってますまない」老人はそういって別の方向を向いてしまう。僕はまた栈橋の方へ歩き出した。そのとき、老人はクロエの耳元でそっと何か助言のようなものをした。クロエは何の反応も示さずに夏の湖のなかに佇む。風が帽子から出た彼女の髪の毛をそっといたずらのように揺らした。クロエはまた僕の方に向かって歩きだした。先にボートに降りてクロエの手をつかみ、彼女をボートに乗せたとき、音楽が鳴りはじめたように僕は嬉しくなった。逃げることも忘れて櫂をこぎながら、クロエを正面にみつめて僕は時間を忘れる。水面は周りに群生する高木をきらめきのなかに映していた。舟をとめて湖上で僕たちが静かに過ごしているとき、波紋があちこちから届く。奴らが半円を描くようにしてこちらに向かってくる。公園に不釣り合いな背広が滑稽だった。奴らはいらだった表情を浮かべている。湖に栈橋は三つあり、それぞれから舟を出すことができ、奴らはそれぞれの栈橋から囲むように僕たちに向かってきた。三角形の中心に位置する僕らはずいぶん銃をだすべきか迷った。発砲すればこちらでも無事では済まされない。彼らも恐らく武器は所持しているだろう。水面に円錐形の黄色いポールが立っている。何を意味するものなのか分からない。穏やかな風が公園を横切っていく。水面に波紋がいくつもの円をつくりながら、水際に生える木立と一緒に揺れている。水底から大きなものが浮かんでくる。水柱が立つ。追跡者たちの舟は転覆してしまう。

黄ばらの花束

昼日中のダブリンに人の形に繰りぬかれた海が突然現れたことに、市民たちは驚いていた。幻なのか、前衛芸術なのか、ホログラムなのか誰も判断することはできなかつたろう。白いポロシャツの若者たちが合唱の練習をしている横を走り抜けた。噴水を隔てて水しぶきをなかに彼らが歌っているのが見える。彼らの「ロンドンデリーの歌」が公園中に響くようだった。それから動物園と、世界の花の温室と、野菜市場を通り抜けて僕たちは雑踏の街に出ようとする。セントスティーブンスグリーンのちょうど入口のところで黄ばらの花束を両手いっぱいを持った婦人とクロエが正面衝突をしてしまう。夏の陽ざしのなか、黄色の花びらが宙を舞う。婦人は「ごめんなさい」と言いながらクロエの方を見る。クロエは立ちあがって婦人に手をかして婦人を起こす。何も言わず一礼だけしたクロエはからだについた花びらを撒きながらまた走り出す。帽子の上には一輪の花が崩れない形で残っていたのが可笑しかった。

アン・リーシェンタルブの手記

あたしが森で暮らすようになったのは、隣人とのささいなトラブルからはじまる、あたしは動物が好きで、九官鳥を飼っていた、その九官鳥は滅多に啼かないはずなのに、偏屈な隣人はあたしと会うたびに「鳥の啼く声がうるさくて眠れない」としきりに言いたてた、あたしはそのたびに謝罪をして、隣人をなだめた、ところが隣人の嫌がらせはエスカレートしてクラックフ通りの掲示板すべてに、〈手に負えない動物を飼うことは控えましょう〉とあてつけに九官鳥のイラストが書かれた張り紙をはり出した、あたしはあたまに来て、抗議に行くのだけどインターフォン越しに「自業自得でしょ」、といわれてそれ以上は話をする機会もとってもらえなかった。

あたしはついに引っ越しを決意するのだけど引っ越し先はこの街からずっと遠い、森のなかに決めた、「九官鳥を飼っても誰も文句を言わない場所」というのがあたしの第一条件だったの、ところが不運はまた続き、一年も経たないうちに九官鳥はノラ猫にさらわれてしまった、あたしは家のなかで三日泣きつけてようやく涙が涸れるころに、ひとりの旅人があたしの家の扉をたたいた。

「泊まる家がなく困っている」とだけ言い、勝手に部屋のなかに入ってくる、旅人の言葉はまるで異国の言語を聴くように耳に新鮮な話し方だった、あたしは不思議に思いながらも誰かと話がしたい気分だったから彼にシナモンの紅茶を淹れてあげた、彼はその紅茶の匂いが格別気に入ったみたいでいつまでも紅茶を飲まずに匂いを嗅いでいたから、そんなに惜しまなくてもまだいくらでもあるわ、と言うと彼は笑って紅茶を飲み干した、舌をやけどしたみたいで彼は犬のように舌をだして冷まそうとした、わたしは彼の可笑しな姿を少し笑ってしまう。

東の間、彼はあたしの森の住まいに滞在することになる、口笛ばかり吹いて何もしなかったが、裏庭に育てている香草の面倒は見てくれた、彼が来てからあたしの香草はますます良い香りになっていくようだ、しかし実際のところ、彼は何もしていない、小川から汲んできた水を定期的に撒いてくれるだけだ。

ある夜、少しも眠気が訪れなかったから二人で森を散歩して横たわった大木にビニールシートを敷いてその上に座り、あたしたちは月を見る、満月に近い大きな月はあたしを雄弁にさせて、いろんなことを彼に話した、彼は自分のことは一切話をしなかったのだけど、「あなた職業は」とあたしがつまらない質問をすると「小説家」と彼は答えた、びっくりして名前を訊いたが耳にしたことのない名前だ、あたしは本を読むのはわりと好きでジェイムズ・ジョイスで学士論文を書いてもいた、ジェイムズ・ジョイスという名前がでた途端、彼は目の色を変え『ユリシーズ』や『フィネガンズウェイク』について語り出す。

夜が過ぎ去って月はいつの間にか消えて、朝焼けが地平線の彼方から訪れる、あたしはサンドウィッチを作って旅人に渡す、それから庭の香草も彼の上着に忍ばせる、彼は匂いに敏感だからすぐに気がつくかもしれない、彼はシャワーからあがってきて、何も言わずに上着を着る、彼が一瞬微笑んだそのときの表情をあたしは死ぬまで忘れないだろう。

「いつか、僕たちの好きな小説家の街—ダブリン—で再会ができたらいいいね」
「そのときは、またシナモンの紅茶を淹れてあげるわ。あなたももう少し有名になっていてね」そう言ってあたしたち二人は再会を誓った。

うずまきもようの犬

空腹を感じて僕らは街の片隅のレンガ造りの塀を持つ、パン屋に入った。挽きたての珈琲と自家製ジャムをそろえた店でオープンテラスには芝生が敷かれていた。混雑しておりじっくり選んでいる暇もなかったから、僕たちはそれぞれ「焼き立て」と言う札のたっていたバトルを買い、店を出て路上でちぎりながら食べていた。店の前で同じようにパンを食べていたひとは他にもいて、白い犬に分けている少年もいた。僕たちは近づいてぎょっとした。くすんだ白い毛にうずまきもようの茶色いしみ。アンファンテリブルそっくりだった。それどころかアンファンテリブルに間違いないと僕らは喜び、クロエと僕は手を差し出した。けれどその犬は僕らに気付かず、夢中で少年の撒いたパンくずを食べていた。

「この犬は……？」

「ああ、つい最近みかけるようになったんだ。たぶん誰かの捨て犬だと思う。よく公園をうろついているからこうして時々パンを食べさせに僕が連れだしているんだ」少年の顔は十三歳の頃自分によく似ている気がした。

僕はアンファンテリブルのくすんだ白い毛を撫でてみた。アンファンテリブルはやっと僕に気が付いて僕とクロエにまなざしを向けた。懐かしい友人を見るような潤んだ目に見えたがそれは僕の勝手な思いすごしかもしれない。彼はひとしきり僕とクロエを見るとまたパンに夢中になった。それ以降、まるで別人のようにアンファンテリブルは僕たちを無視した。

「たぶん、この犬は耳が不自由だと思うんだ。だから僕が世話することに決めただよ」少年は誇らしげにそう言った。

ものかき

わたしのはだが海の色と同色になったとき わたしの存在に気がつくにんげん

はごくわずかしかなかった ある夏至のひ わたしは始まりのみさきの灯台
がたつ崖のしたにねぐらをつくりねとまりをそこでしていた

やわらかいきれいなしろい砂浜がありそこにねころぶと 遠い海の星の砂が奏
でるさざなみすらも聴こえるようだったから 目をつむりながら海とひとつに
なっているとひとりのにんげんが目をまるくしてわたしをみている
そのうちわたしになにかをはなしかけてくる 真珠のような瞳をしてちいさな
さかなのようにクチをぱくぱくさせている にんげんなどわたしにとってはわ
らい草のいっぽんにもなりはしない

けれどその真珠のような瞳をしたにんげんはあくるひもあくるひもそのまたあ
くるひもわたしのねぐらをおとずれる ごうを煮やしたわたしは朝靄うかぶま
だほのぐらいしづかな海にそのにんげんをつきおとしてやろうとしたのだがに
んげんは抵抗をせずわたしをなすがままにされてそのまま海におちていった

わたしはまた筏のようにわたしよりもさきに死んでいく者が憎くて憎くてなら
なかったから 死のまぎわでにんげんをすくいあげ のみこんだ水をはきださ
せてやった にんげんはよろこびまたそのしづさがわたしの癩にさわるのだっ
た にんげんはげいじゅつかだとみずからをしょうして何をしているのだと問
うと「ものをかいている」とこたえた あろうことかわたしをものがたりのな
かにだしてよいかとたずねた

二十二通目の手紙

フラクタルと言う言葉は数学用語でいまだ厳密に定義されていない。二人は
知っているだろうか。聞いたことがあるだろうか。たとえば君たちは海を廻る
とき海岸線と言うものに辿りつくだろう。人間が作った図形はどんなに凹凸が
あろうとも拡大すればいずれ滑らかな直線に辿りつく。けれど自然は微視的に
海岸線を捉えていき、拡大の倍率をどれだけ上げて言ってもそこに直線は存在
せず、繊細な凹凸が繰り返されている。海岸線そのものが凹凸の形を地図上の
大きさでも表現しているながらそれを拡大しても、なお相似的な輪郭の連続—こ
のような現象を借りにフラクタルと定義する。フラクタルはもちろん人工的に
図形を組み合わせることによって創造可能だ。だけど私が真に美しいと感じる
フラクタルは自然の造形物だ。風と波の摩擦によってできた海岸線が全体と細
部を相似形にしている。興奮してこないか。その偶然の事象に。きみたちは自
身の輪郭を思い返してみればいい。きみたちは「海」と「森」の輪郭に縁取ら
れている。海岸線同様に海は世界の様々な陸地と凹凸あるいは曲線を描きなが

ら繊細に隣接している。もちろん曲線そのものも凹凸によってできている。そう、森もその形を人間が想像で作った図形にあてはめることは不可能であり、すべての森はひとつひとつその全体像を固有しており、その輪郭もまた様々な樹木の肌や枝ぶりによって複雑な形を成している。わたしが言いたいのは、きみたちは人間のつくったちやちな図形などではなく自然が産んだ繊細な凹凸の実態そのものであるということ、それだけなのだ。

旧市街の洪水

ホテルブルームハウスの部屋。冷たい雨が窓を叩いていた。僕たちは窓辺の椅子で向かい合い、故郷への帰り支度を済ませ、珈琲を飲んでいた。雨の日に飲む珈琲は美味いと兄が呟いていたことを思いだした。クロエは何も語らず、僕も兄のことを思いだすばかりで何を話せばいいのか分からなかった。

「わたしたちの旅に収穫はあったのかしら」

「海の巨人の正体を掴むこともできなかつたし、『ダブリンアース』社をみつけることもできなかつた。おまけにアンファンテリブルはダブリンの街に消えてしまった」

「誰にでも行きたいところはあるわ。アンファンテリブルは首輪をつけていなかったじゃない。彼は彼の自由意思でダブリンを歩いていたのかもしれない。わたしたちをみつけても帰ってくることはなかつた。住みたい街があるのに無理に引き離してしまうのはかわいそうよ」

「そうかもしれない。目に見える収穫はなかつたかもしれないけど、こうして色んな出来事に遭いながらも特別な時間を過ごすことができた。クロエ、帰ったらきみは何をしたい？」

カップを傾けながらクロエは少し黙った。眠そうな目をしていて。大分考えてから「ゾンビ映画を一日中見たいわ」クロエはそう言った。

テレビでは洪水のニュースが伝えられていた。ダブリンのリフィー川南側にある旧市街で大洪水が起こっているそうだった。僕とクロエはテレビの方をぼんやりとみつめる。

アナウンサーが「旧市街に溜まる水の成分を分析したところ、どうやら海水の成分とよく似ていることが分かりました。なお、この雨の影響でもなく、津波発生ありませんでした。専門家が洪水の原因について調査中です」と伝えている。「海の巨人のせいだろうか」僕は呟いた。「分からないわ……。でもグスターフの夢からやっと解放された気がする」

クロエがそう答えた。ダブリンの街に降る雨はまだ止む気配を見せない。

二十年後の浜辺

僕とクロエは三十五歳を超えても結婚もせず、恋愛らしいこともせずお互いが独身のまま友人関係が続けていた。クロエは生物の教師になり、僕は住宅設備機器の営業をしている。時折休みになるとお互いの家で昼食を作って、シャンパンを飲み映画や本の話をした。公園に散歩に行くこともしょっちゅうあった。周囲の友人たちからは結婚を勧められたが僕たちは、不思議とそれに従わなかった。幼馴染の友人という関係以上は望まなかった。

ある日、ファイエット郡から三十キロほど離れた浜辺に巨大な烏賊が漂着したという知らせを聞いた。腐臭が浜から少し離れた港町にも漂ってきていて、住民たちはマスクをかけて歩いているらしい。巨大烏賊はまだ回収されることなく、浜辺に横たわったままだと聞く。

先月買ったばかりの中古車のクーペを走らせて海沿いを走る。海は穏やかなのに、色が灰色だったから何だか気分は晴れなかった。やがてその浜辺に到着すると報道陣や野次馬たちでいっぱい巨大烏賊を見るのはまるで順番待ちだった。かきわけてその烏賊の正面に出たところ、トラックのタイヤほどの瞳が僕を見据えた。もちろん、動かない。周囲は烏賊だ、烏賊だと騒いでいたけれど僕にはどうもそれが烏賊に見えなかった。

「いま、あなたが考えていることがわたしには分かる」クロエが言った。

「それは僕も同じだよ」相槌をうってそう返した。

(了)

この物語はフィクションであり、実際のレキシントンやファイエット郡、ダブリンの街に創作を加えているので、本物とかけ離れていると思われます。